

# 明治の佐伯三青年 28

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

## 「経国美談」の発刊

改進黨と自由党、政府と政党的駆け引きが熾烈になる頃、明治十五年のこの夏は、矢野や藤田にとっては、期待の中にも緊張の続く多忙な日々であったが、藤田には家庭に思わぬ不幸が待っていた。矢野が疲れから床に伏している頃、東京ではコレラが流行しつつあったが、藤田が苦学生時代から苦楽を共にした豊吉が、この恐るべき伝染病にかかった。

当時のコレラは「コロリ」といわれ、一度かかればころりと死ぬと恐れられた伝染病であったが、この豊吉の看病を買って出たのが犬養であった。犬養は書生時代に豊吉に受けた恩が忘れられず、下の世話までしたと伝えられている。豊吉の死亡広告は大養毅の名で出されたが

後記する。

藤田は、五歳になる敏夫の淋しそうな顔を見るにつけ、災難ともいふべき豊吉の死にとまどったが、時局は一日も待ってくれなかった。政府の政党内の切り崩しは地下で着々と進行していた。

秋になると、大隈はかねてから計画中の学校設立にこぎつけた。現在の早稲田大学の前身東京専門学校である。学校の設立に当っては、小野梓が大隈の手足となって動いた。「鷗渡会」の小野梓については前に書いたが、翌年には、この「鷗渡会」の面々、当時はまだ官学の大学生であった、高田早苗・天野為之・坪内逍遙・山田喜之助・市島謙吉等が官史の道に進まず、教育に携わることになるが、当初の学校設立はさほど楽ではなかったらしい。「大隈侯昔日譚」によると、「政府部内ではわが輩は謀叛人になっているのである。だから大隈は学校を造って、西郷の私学校のように輩下を養成するのである。油断ならぬとなったのである。ことに小野をはじめその他政治関係の人々が大分学校にも関係したため、世間では政治上の目的で、学校を設けたと誤解したのである。それがために最初は生徒が来ぬのに閉口した。官辺の庄

迫は加わる、父兄をまで脅迫して入学を拒ませる。或いは教員を妨げる。今日ではほとんど想像の出来ぬような不思議なことがあったのである」と、大隈は述懐している。

矢野や藤田は、人材の養成につながる大隈の学校設立を歓迎したが、学校設立に眼が向けられているある日、矢野の元に、元の上司であった大蔵卿佐野常民から使いが来た。矢野は今更何事だろうと役所にも行けず、私邸を訪ねると、佐野は十四年の政変以来の再会とあって懐かしく迎えてくれた。

「相変らず意気壯んで何よりじゃ」

佐野はにこにこしながら世間話から始めた。―こりゃ―大した要件ではないらしい。改進黨の情報集めかもしれぬぞ―

矢野が内心そう思いながら警戒心をもったが、話が大隈に及ぶと、佐野は変なことを言い出した。

「それそれ。大隈さんの学校もよいが、大隈さんにはもう少し国事の為に働いてもらわねばならぬ―」

佐野はここで一端唾をのみこんでから続けた。

「どうであろう。伊藤さんもヨーロッパに行かれていますことでもあるし、大隈さんも洋行されてはどうかと思っている。一つ君から勧めてみてくれないか」

矢野は思わぬ相談事に一瞬返答に窮したが、間をとることによって口実を考えた。

「見聞を広めることにしたことはありませんが、学校を設立したばかりで―」

「何かと多忙で物入りのこともよくわかるが、費用のことは何とかなるものじゃ。ただし夫婦連れの物見遊山ではかなわぬが―」

佐野はこう言っつてあとを濁したが、矢野は咄嗟に考えた。

―佐野大蔵卿がそんなに金持ちとも聞いていないが、これが政府の誘い水かもしれない―

「勧めるだけ勧めてくれぬか」

佐野は再度念を押したが、矢野の口からは自然に反対の言葉が出た。

「それは無理でしょう佐野さん。大隈さんは私事で他人の援助を受けられるお方ではない」

「無理かなあ―」

佐野ははじめて残念そうな顔をしたが、矢野は、旧藩主の鍋島さんの援助ならともかく、大隈さんが政府の懐柔にのるとは思わない。むしろ勧める自分の方が軽蔑されると思ったが、そんな思惑は口には出さなかった。翌日、矢野は藤田にだけはそっとこの話を打ち明けたが、その日以来、矢野や藤田は、政府が水面下で着実に動いていると肌で感じるようになっていた。

その矢先、月が変わって十一月になると、自由党の領袖板垣と後藤象二郎の洋行問題が起こった。報知社内では朝からこの問題で議論が沸騰した。

「行きたい奴は行かせればいいじゃないか」

「馬鹿。板垣が行こうが後藤が行こうが、洋行が問題ではない」

「ならば何が問題じゃ」

「板垣に金があるとは思わん。費用の出所が問題なんじゃ」

「その通り。政府の金で行くとなると許せん」

一段と大きな声は尾崎の憤慨する声であった。

「うーん」

矢野と藤田はうなつたまま考え込んだ。

「やられましたな矢野さん」

立ち上がった藤田は矢野の後ろに立っていた。

「うん。板垣さんは金に頓着する男ではないが、後藤が落ちたのかなあ」

矢野はこう言いながらも半信半疑のふうであった。

「何れにせよ政府の思う壺じゃ。政府は両党の離間政策に自信をもったであろうのう。これで自由党との連帯は完全に断ち切られたわい」

視線を合わせた藤田も大きく首肯していた。

板垣や後藤は十一月十一日横浜港を出航した。

この時の板垣等の洋行費の出所については、はっきりしないままであった。洋行先で板垣は大分不自由したらしく、後にドイツにいた伊藤博文が、見るに見かねて援助の手をさしのべようとしたぐらいであるから、板垣は案外自分で工面して洋行したのかもしれない。

しかし、世論の風評は冷たく、一挙に政府や自由党へ非難攻撃の火の手が上がり、そのために、大石正己・馬場辰猪等は憤慨して自由党を脱党する始末で、留守は古沢滋が党を預かるようになった。論客が去ったあとと自由

党勢の沈滞はいなめなかつた。

こんな世論が引き金になって、十二月に入ると福島事件が起つた。政府転覆を陰謀した福島県会議長河野広中や愛沢寧堅等が、わが国はじめての国事犯として拘引された事件である。さきに改進黨は、今でいう三菱との癒着という汚名を着せられて、自由党から「偽党撲滅」と攻撃せられたが、その自由党が陰で政府と結んでいるとなると、世論は黙ってはいない。泥沼の様相を呈してきた。

矢野はこれらの事件を傍観しながら、年の瀬も迫って再び佐藤を誘つた。

「蔵太郎。こう事件が続くと少々うんざりする。こういう時は執筆に限る。例の歴史物語も完結に近づいた。また応援を頼むわい」

依頼された佐藤蔵太郎は、一も二もなく承知した。

「少々寒いがのう」

夏以来、戸外はそろそろ木枯らしが吹き始めていた。

矢野は苦笑していたが、佐藤にとっては社の給料とは別に内職の出来る楽しみがあった。

こうして、矢野がギリシャ史からヒントを得、はじめ

て民心作興のために筆をとった政治小説の原稿は、佐藤の手で清書され、年を越した一月、「経国美談」として報知社から発刊された。

内容を知るために、第五回までの見出しを列記しておく。

第一回 賢王賢士済民ノ功業ヲ立ツ

一群ノ童子等史談ニ感激ス

第二回 希腓列国ノ形勢

第三回 奸党詭計ヲ用井テ民政ヲ覆ス

諸名士難ヲ脱シテ阿善ニ走ル

第四回 兵威ヲ弄テ公会ヲ解散ス

大会堂ニ諸名士縛ニ就ク

第五回 江上ノ漁舟夜恩人ヲ救フ

政論上ニ壮士国難ヲ訴フ

この「経国美談」は、発行以来意外な反響を呼び、今日のベストセラーとなり、当時の立身出世を夢みる青年達で読まない者はいなかったといわれている。ちなみにこの年発行された「経国美談」は前編であるが、私の手許にある「斎武名士 経国美談」合巻は、明治三十年版で、各節毎に鋤雲・柳北・鳴鶴の寸評を載せ、第十六版

を重ねている。尚、纂訳者矢野文雄の当時の住所は、東京府豊多摩郡千駄ヶ谷村字原宿式拾壹番地となっている。

「経国美談」の反響によって、民心の渴望を知り得た矢野は、意気軒昂として党勢の拡張につとめた。自由党への反論は、主として藤田等の健筆陣に任せ、自らは尾崎等を連れて地方遊説に出掛けた。演説会は自由黨員から三菱との関係を攻撃されることも度々であったが、矢野は臆することなく、今にわかると正面から論陣を張った。この時の東海道の遊説については、伊藤痴遊全集の「国会開設政党史話」の中で面白おかしく紹介している。

矢野は品のよいフロックコート姿、尾崎は黒羽二重の紋付白絹の太い羽織紐で人目を引いたが、夜の懇親会の席では自由黨員が糞汁を広間に投げ込んだというから、当時の政党内の争いも相当なものである。そして、小室信介が自由新聞でこの事を暴露すると、尾崎は報知紙上でやり返すという有様で、こんにちでは考えられないことである。尚、痴遊の見る矢野と尾崎の人物評については次のように書いている。

矢野は品格のある人で、其の呼吸はよく知っていても、自由から乗り出して、その呼吸を捉らゆる事は為し得ない。弁舌も巧みであるが、尾崎のように鋭いところがなく、筆もよく働けれど精気がないから俗受けがせぬ。両人の相違はその外にもあるが、大体に於て、矢野の凋落が存外に速かったのは、其の手柄に有るとしか見えぬ。

遊説に社説に、休む暇のない矢野や藤田であったが、春めいてくると、豊吉に先立たれた藤田に再婚の話がもち上がっていた。

この再婚話については、「明治文化」第十巻第六号に記者であった篠田鈺造が、「藤田茂吉の正妻」の見出しで紹介している。体裁よくまとめられているので全文を転載することにする。豊吉の死亡広告についても記述がある。

#### 良い御婿さんを御世話

郵便報知新聞社長藤田茂吉（鳴鶴）の妻女は花柳界玉の輿組（新橋芸妓豊吉）で、犬養毅の書生時代の面倒を能く見てやり、同女のコレラに罹るや、犬養は下の世

話までしたと伝えられ同女死亡広告（明治十五年〇月十九日死）には（コレラ故翌月葬儀となる）

藤田茂吉亡妻葬儀来る五日午後一時浅草東本願寺に於て執行谷中墓地へ埋葬致し候に付此段辱知諸君へ御通知仕候也

犬養 毅

と掲載されているのに、正妻といふは、不思議に思はれるが、二度目の妻女は、初婚の花嫁で、北海道開拓使権大書記官内海利貞の娘。これを大隈参議夫人が世話したものととなっている。先夫人は内縁といふ風に取扱はれて、内海家より正妻となつて嫁ぎ来つた。其由緒因縁に就て、左掲の実話を聴き得た。

「内海家の令嬢が、藤田茂吉さんと、良縁が結ばれ初婚で嫁いだ事の起由おこりに、不思議な御縁とでもいひませうか、遡れば明治十四年、明治大帝北海道御巡幸の大隈参議はこの籠籠に扈從されました。其時綾子夫人も参議に付随されましたが、北海道書開拓使の書記官連中の夫人令嬢は、大隈参議夫人を御慰めする為め、挙つて御接待申上げたが、内海の奥さん令嬢は一番親しく付き、東京在住の出身とて、殊に御話が持てまして、

綾子夫人は如才ない御方ゆえ、内海の奥さんに向ひ、「この御嬢さんには、良い御婿さんを、私が御世話しあげますよ」と仰いました」

新富座で見合の一幕

然るところ、開拓使は廃庁の運命を迎へ、内海家は東京へ引揚げることとなり、大隈参議また下野されて、改進黨旗上げの時代、元来内海利貞といふ仁は、開拓使でも會計を司り、經濟事情に明るいところから、大隈邸に出入る關係が結ばれ、内海夫人も、北海道の關係から、綾子夫人の御機嫌伺ひに出る機会が作られますと、綾子夫人は前言を忘れなされず、

「御嬢さんに、良い御婿さんを御世話すると申し上げましたが、ここに当代の名士で、前途有望の好人物があります。奥さん如何ですか、御嬢様の行末の為め、御考へ遊ばしませ」

と橋渡がありましたから、内海家では他ならぬ綾子夫人の御言葉、三國一の婿は、郵便報知新聞社の社長、名士の中の名士、未来の傑物である所から、娘の出世を考へずにはいられませんでした。唯二度目とはいへ、前の

は内縁の女であれば、正妻になれると認め、何は兎もあれ、見合をせねば、娘の氣に入るかどうかとも、縁談の一大事と、其頃の新富町の劇場新富座で落合ひ、観劇見合が行はれました。斯時をかしいのは、当の御嬢さんより、附添った兄さん達二人が、藤田の立派な男振（美男子の方）といひ、明快の氣風といひ、一見秀抜の紳士であるのに惚れてしまひ、婚儀頓々拍子に進んで、山谷の八百善で芽出度挙式されました。

この夫人は藤田茂吉の正妻となつて、多年内助の聞えがあり、一男二女を生み、賢未亡人となつて、大正年間に終生された。内海側では、

「先妻とよ子さんは内縁の方でした」

と言っているが、ソレはどつちにてもよく、最近耳にした一話を綴つて置く。

（付、大隈夫人が御巡行に随行したのは疑問である。或は東京に於ける開拓使出張所又は開拓使仮学校に行きたることを指すにあらざるか。千田生）

藤田の結婚については、先年藤田の孫に当る相馬文子氏が、「相馬御風とその妻」の著書の中で、同じく篠田

記者の同文を転載されたあと、

「一はからずも私の祖母となる人、内海鈴子は、明治三十二年十一月十二日に亡くなつていたので、没年は誤つているが、大部分は事実とあまりかけはなれてはいないと思う」

と補正され、内海利貞の三女鈴子と、藤田茂吉の結婚は、明治十六年の春のことであつたと結んでゐる。

藤田は家庭的に落ち着いたが、党勢拡張の手段は次々に講じられていた。学校設立を果した大隈は、新聞機関の増設を計画し、報知社は加藤を大阪に送り、犬養も又改進黨の機関紙として秋田に生まれた秋田魁新聞に主筆として招かれた。その矢先、この明治十六年四月、政府は再び新聞条例を改正し、言論の自由を圧迫した。追いつめられた小新聞は、やむなく廃刊するものが続出し、政府に反発する政党や言論機関との駆け引きはますますはげしくなつていた。

この時期に板垣と後藤が帰朝した。板垣の洋行については、当初洋行費のこともあつたが、一党の総理として外国ぐらゐは見えておくべきとする者、ドイツで伊藤博文

と妥協するのではないかと危惧する者、様々な論争の中の出発であったが、多くの自由黨員は、外国に渡った総理達、更に自由民権の思想を究め、今後いかなる運動を展開するか、首を長くしてその帰朝を待っていた。だが、帰朝した当の板垣は意外に冷静であった。

「欧州各国の事情を察するに、国民の社会生活は著大の進歩を示しているが、政治社会の進歩は寧ろ之に後れてゐる。我が国の事情は之に反し、政治社会のみが独り大に進歩して、生活社会は遙かに其の下位に在ると云う有様である。凡そ人間社会は生活の必要あつて然る後に政治の運用があるのである。是れ即ち自然の定則である。我が国は之を転倒し、政治があつて然る後に生活があるが如き状態に陥っているのは最も慨嘆に堪えない事である」

あたかも、

「政論よりも先ず社会の改良充実を計らねばならぬ」

という板垣の帰朝挨拶は、政権交代を期待するはげしい自由黨員を満足させるものではなかった。こうして、期待を裏切られた自由黨員は次々に党を離れ、自由党の党勢は次第に沈滞するようになった。

この様子を静観していた改進黨は、逆に勢を得、報知社内は日増しに騒々しくなっていた。

「それみる。自由党の奴等に何ができる」

「この際、一挙に自由党を叩きつぶせ」

勇ましい意見が続出したが、日が経つにつれ、町では変な噂が立ち始めていた。

「おい。わが党と三菱との関係を攻撃していた自由新聞が、こともあろうに、政府の共同運輸会社とぐるに나っているらしいぞ」

「三菱の攻撃どころか、自ら墓穴を掘っているわい」

「よしよし。自由新聞は政府の走狗だとすっぱぬいてやれ」

報知の上局は、連日の町の噂に湧き立っていた。

矢野は独りこの噂にほくそ笑んでいた。

「のう茂吉。やとわし等の真意がわかつてくれる時期がきたわい」

「これで三菱にも顔が立つ」

藤田も安堵したようにぼつりと答えた。

「それにしても、あの板垣さんが何か感じとる程、ヨーロッパの諸国は進んでいる。日本の鎖国は大分遅れたの



う」

矢野はしみじみと言った。

政党間の反目は熾烈を極めたが、自由党の一時期衰退は、改進黨ばかりが喜んでいられなかった。民心はこの頃から政黨に対する不信感を抱き始めていた。その方が恐かった。政黨流の無秩序は今も昔も変わらない。

政黨間の軋轢が高じる頃、夏になって、憲法制度調査のため、渡歐していた伊藤博文の一行が、一年五カ月ぶりに帰朝した。



オランダ船リーフデ号の白杵湾内佐志生海岸漂着説について (第一四九号) 正誤表

ページ	行	誤	正
五	上十二	原処史料	原拠史料
九	下五	受けるまでもよく	受けるまでもなく
一〇	下三	相見しても	拝見しても
一一	下一一	危	危具
一六	下九	二五座	二王座
一六	下一九	大友死亡後	大友氏亡後
一八	下一五	大河内秀之	大河内秀元
二〇	上二二	水源	水源
二一	上七	前記	前注
二一	上一一	宗敬者	崇敬者

以上、訂正してお詫び申し上げます。

(編集者)